H26年度　上越教育大学実践研究発表会
ポスター発表申し込み　（申し込み順）　2014/10/28現在

	名前	所属	学外	テーマ	発表要旨	備考
1	檜垣栄慈	愛知郡東郷町立音貝小学校	学外	意識的な手話使用が聴覚障害児の発話内容に及ぼす影響	本研究は，音声言語中心の聴覚障害児２名を対象として，意識的な手話使用が発話内容に及ぼす影響について検討することを目的とした。4コマ漫画（４枚一組）を30秒間提示した後，4コマ漫画を隠してその内容を対象児に報告させた。まず，手話と音声で課題を実施した。１ヶ月後，音声のみで課題を実施した。両課題における発話内容の文節を「行為」「人の状態」「物の状態」「心的状態」「不明」に分類した。その結果，手話と音声で課題を実施した方が，「人の状態」や「心的状況」に関する言及が多かった。音声言語中心の聴覚障害児が意識的に手話を使用することにより，発話内容の明確化を促すことができると考える。今後は，手話使用が効果的である学習者の条件に関して検討することが課題である。	前半の発表とする
2	村井　敬太郎	山梨大学教育人間科学部附属特別支援学校	学外	知的障害児の基本的な動きの向上を目指した体育実践	知的障害児の日常生活での身体の動きやスポーツへの取り組みを高めるためには，人間の身体活動の基礎となる「36の基本的な動き」(以下，「基本的な動き」とする)を獲得し，洗練していくことが重要である。今回は知的障害特別支援学校小学部における，基本的な動きを高めることを目的とした体育実践の経過と今後の課題について報告する。この実践は小学部合同の学習形態で行っており，「室内運動」と「屋外運動」で展開している。「室内運動」では授業全体で動きの種類(多様な動き)を増やすことをねらい，授業前半は運動量(動く量)を確　保し，授業後半は動きの質(適切な動き)を高めることを重視している。「屋外運動」は授業全体で運動量(動く量)を確保し，主運動の前後に行う準備運動や整理運動で動きの質(適切な動き)を高めることを重視している。これらの学習に年間を通して取り組むことで，児童の日常生活やスポーツおける身体の使い方が少しずつ向上してきている。	
3	齋藤一雄	上越教育大学	学内	特別支援学校知的障害者用音楽科教科書の分析	2011年に特別支援学校知的障害用音楽科教科書（☆本）が改訂された。改訂の方針は「新たな教材を選定する」「楽器をより多く扱えるようにする」などである。調性、拍子、速度、音域、教材選択の観点などについては、特に大きな変化はみられなかったが、楽曲を題材ごとにまとめた、楽器を扱う教材をまとめた題材名が多い、新掲載曲が多いなどの変化があった。題材名は様々な表現をとっているが、ねらいや音楽活動がわかるようになっており、子どもの実態や生活、季節、音楽活動の目的やねらいにそって配列していた。また、教材選択の視点について、特に、感情や美などの情操に関する視点、人とのかかわりなどの自立活動との関連を考えた視点があげられていた点がこれまでと異なる。さらに、☆本に掲載された多数の教材を実践で活用することが必要だと考える。	
4	中嶋　忍	上越教育大学特別支援教育実践研究センター協働研究員	学外	大正時代の教育雑誌「信濃教育」における乙竹岩造『特殊教育論』に関する研究	長野県は明治時代から，学力劣等などの子どもに対する特別な教育を先駆的に行ってきた。こうした取組は，教育実践論文として教育雑誌「信濃教育」に掲載されていたが，個別の教育実践のみで総論的な論文が見られなかった。そこで，信濃教育会は，教育講習会で特殊教育について講演を行った東京高等師範学校（現筑波大学）教授の乙竹岩造氏の内容をまとめて大正2年に『特殊教育論』として信濃教育に掲載した。本研究は，この『特殊教育論』を取り上げて，明治末～大正初期の特殊教育の考え方を明らかにした。その結果，特殊教育については，①「特殊な教員が特殊な事情のある児童のみに対して行う教育」をいうのではないこと，②教育を通常教育と特殊教育とに分けて考えるのではなく，すべてのものを含めた教育全体の中で展開されるべきであること，③日本の状況を見ると特殊教育事業が急務であること，などを論じていたことがわかった。	ポスター掲示等支援

5	○廣田稔 藤木美香 村中智彦 齋藤一雄	十日町立ふれあいの丘支援学校	学外	特色ある交流及び共同学習	当校は、平成２５年度に十日町小学校、ふれあいの丘支援学校、市発達支援センターの三施設が、共生の理念の実現を目指す「夢の学校」として誕生した。当校の交流及び共同学習は、①併設の十日町小学校との連携による積極的な交流により、地域の中で共に生きる社会の基盤づくりに努める、②様々な人たちと活動を共にする中で経験を広げ、豊かな人間性の基礎を育む、を基本方針に、十日町小学校とふれあいの丘支援学校の交流を核として「共生教育」を推進している。「共に見つめよう」「共に手を伸ばそう」「共に近づこう」をスローガンに、障がいのあるなしにかかわらず、共に学ぶ喜びや楽しみを子どもたちは感じている。十日町小学校との主な取組は、学校行事では、城ヶ丘ふれあいカーニバル（運動会）、城ヶ丘ふれあいフェスティバル（文化祭）、やまびこ班（縦割り班）活動などがある。交流の中心となる４年生とは、給食、授業、休み時間などにおいて様々なかかわりをもつ。本発表ではその取組について紹介する。	
6	○石田脩介・川住文博・植村祥子・大庭重治・池田吉史・八島猛	上越教育大学	学内	小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の他者との係わりの変化を促すための支援課題	特別な教育的ニーズのある児童が主体的に学習を進めるためには，支援者や他児との良好なコミュニケーションの獲得が期待される。このような他者とのかかわりの変化を促す際の支援方法の開発では，他者とかかわる必要性のある課題を提示し，その課題の遂行過程において観察される援助要請，援助提供，相互学習の様子を分析することが必要である。本研究では，このようなかかわりの変化を促すために開発した課題の中から，「まちが絵探し」と「いろいろトレジャー」について紹介する。「まちが絵探し」は街が描かれた用紙から，様々な情報を引き出し，記憶し，メモに起こし，MTの出す○×クイズに回答する課題である。また，「いろいろトレジャー」はそれぞれ別の情報をもち，その情報を出し合い，グループで何色の宝箱に，どんな宝が入っているのかを当てる課題である。どちらの課題も，様々な特性をもつ児童が，それぞれの力を発揮でき，他者と協力して，助け合いながら解決を目指せる課題である。	
7	○小林里美・中村潤一郎・加藤裕貴・大庭重治・池田吉史・八島猛	上越教育大学	学内	小集団学習場面における特別な教育的ニーズのある児童の自己表現の変容を促すための支援課題	特別な教育的ニーズのある児童の中には，他者理解や語用論的理解などの発達が不十分であるために，適切なコミュニケーションが得られないことがある。このような児童が支援者や他児とのかかわりの中で学習を進めるためには，自己尊重と他者尊重のバランスがとれた，いわゆるアサーティブな自己表現の獲得が期待される。本研究では，このような自己表現の獲得に向けて開発した課題の中から，「図鑑をつくろう」と「みんなで考えよう」について紹介する。「図鑑をつくろう」はランダムに引き当てた生き物1種類について，「写真」または「文章」の情報を活用し，各自で1ページの図鑑を作成する課題である。「みんなで考えよう」は，「絵」または「ことば」のヒントを手がかりに各自がひとつの単語を探しあて，最後にそれらの単語から共通のキーワードを全員で協力して考える課題である。どちらの課題においても，自分に必要な情報や担当したいヒントを考えたうえで，提示された人数枠内に希望者が収まるように交渉し話し合う機会を取り入れた。	
8	池田吉史	上越教育大学	学内	Stroop-like Big-Small課題における知的障害児・者の抑制機能の特徴	実行機能とは、新奇的な目標を達成するために意識的に認知や行動を制御する能力である。抑制機能は、不適切な思考や行動を抑える能力であり、実行機能全体の発達に重要な役割を果たすとされている。本研究では、幼い子どもに実施できるStroop-like Big-Small課題を用いて、原因不明の知的障害児・者の抑制機能について検討した。その結果、精神年齢が一致する知的障害児・者と定型発達児との間に干渉効果に著しい差がないことが示された。他の抑制機能課題を用いた先行研究では、知的障害児は精神年齢が一致する定型発達児よりも干渉が大きく抑制機能に著しい弱さがあることが示されている。これらの知見の相違の背景として、干渉生起機序などの課題特性の差異や生活年齢の差異の影響が考えられ、今後はこれらの点についてさらに検討する必要がある。	

9	井上和紀	新潟市立巻北小学校	学外	特別な支援を要する児童に対する学習指導の現状と工夫	小学校特別支援学級で学ぶ児童にとって、学習活動を継続して行うことが困難な場合がある。しかし、その原因を考えることにより、その困難さを少しでも軽くすることができると考えられる。本実践では、小学校特別支援学級での日々の学習指導からその現状を挙げると共に、原因を考察し、それを軽減する取組を考える。 　学習活動を継続して行うためには、学習に対する動機づけを高める必要がある。動機づけを高める方法の一つに「自己効力感」がある。この概念は「人間の行動は認知的活動によって制御されている」と考えられ、「効力期待」と「結果期待」に明確に分けられている。Bandura（1977）は、「効力期待も結果期待も高い場合、自信に満ちた適切な行動や積極的な行動が見られる。」と述べている。本実践では、「学習することに対する自己効力感」に働きかける指導が有効であると考え、「効力期待」「結果期待」を見通すことができる学習指導を考える。	
10	○八島猛，大庭重治，笠原芳隆，久保恭子，横田翼，田谷知鶴，高橋悠，百瀬翔悟，本間佑，宮下早智，堀内郁，岩﨑俊大，中丸奈央	上越教育大学	学内	健康の維持に特別な支援を必要とする児童生徒を対象とした発達支援教室	発達支援教室は，健康の維持に特別な支援を必要とする児童生徒を対象とした個々のニーズに応じた発達支援および保護者を対象とした教育相談の場である。支援スタッフは大学教員と大学院生から構成され，1回/月，3時間程度の活動を行っている。この教室は，病弱臨床実習として大学院のカリキュラムの中に正式に位置づけられており，支援にかかわる大学院生は受講登録がなされている。 平成23年9月からA大学特別支援教育実践研究センターにて定期的に開催しており，現在までに計38回実施した。対象者はA大学近隣の教育委員会の協力により，3市の全小学校を対象として公募し，現在では，小学5年生から中学2年生までの児童生徒6名が参加登録している。本稿では，発達支援教室の目的，活動体制，対象者の参加状況，活動内容，今後の方向性について紹介する。	
11	○坂本のぞみ・村中智彦	上越教育大学	学内	自閉症児の仲間同士のやりとりの変容	自閉症児2名（A児、B児）の学習場面において、個人活動と集団随伴性の適用によるペア活動を実施し、2名のやりとり行動の変容を調べた。A児は小学校特別支援学級1学年に在籍する高機能自閉症男児で、他児への働きかけが多く、コミュニケーション能力が高かった。B児は小学校特別支援学級2学年に在籍する自閉症女児で、他児への働きかけは乏しく、自閉症状は重度であった。ペア活動を通じて、A児は、B児に対して接触する、援助する、学習を代行する行動が増加した。A児の働きかけは、学習場面以外でも認められた。それに対して、B児は、最初は応じなかったが、後半では時々応じることも増え、学習を代行する行動には明確な拒否を示すというポジティブな変容が認められようになった。	